所沢と江戸を結ぶ

新河岸川の2つの河岸場付近の歴史散歩

2018－4－28　記　小川　雅愛
記　大舘　徹

実施日時　2018年4月19日（木）8:40～15:30
参加者　16名

■活動の指針

当初は富士見市の水子貝塚・縄文竪穴住居と難波田城跡の2か所の史跡めぐりを構想していました。そうした中、2月24日（土）歴史講座「幕末期の所沢商人」木村立彦氏を受講し、当時、所沢と江戸が引又（志木市）と水子（富士見市）の2つの河岸場を通してかなり密接に結びつけられていたことを講義と地図「江戸時代の主要道」（木村氏作製）で知り、このことが強く印象に残り、今回の活動の柱に加えることにしました。

講座には主に薪炭商と織物商の活躍がありました。薪炭商を例にすると薪炭は江戸百万の人々の日々の暖房と燃料等に不可欠のもので、武州西部地域がその供給地として大きな役割を持っていたことでした。その集散地が所沢で狭山丘陵のみならず、飯能、青梅、五日市、さらには八王子からの薪炭を仕入れ、引又道や河岸街道を運ばれ、引又、水子の大きな廻漕問屋を経由し江戸との交易関係があったことでした。新河岸川という名称は川越に設けられた新河岸からきておりそのイメージがありましたが、実態は江戸と川越の舟運（しゅううん）のみでなく、流域の上福岡市、富士見市、志木市の地域に存在した河岸場地域およびその後背地と江戸との関係が注目されます。江戸後期から明治の中盤まで薪炭、織物、穀物、特産農産物、日常品、肥料など様々な物産が行きかっていたことが証明されています。

そこで、今回の活動は引又河岸場と水子に存在した山下河岸場を示す2つの史跡を確認するとともにその付近の歴史散歩をテーマとすることにしました。

■スタート

9時40分に新秋津駅に集合し、武蔵野線、東武東上線を乗り継ぎ志木駅まで行き、東口からバスに乗り、最初の目的地、往時の水陸の要衝引又の史跡に到着しました。志木市役所がすぐそばに見える市場坂上のバス停のすぐそばには武州世直し一揆被害を受けた豪商のひとつ「旧西川家潜り門」があり、門柱に生々しい打撃痕跡が見られました。

■引又河岸場跡・舟運の歴史案内（志木市教育員会、文化財指定史跡）　見学

市場坂上の坂を降り切っていくと柳瀬川と新河岸川が緩やかに合流する地点に、引又河岸場跡と表記された四角柱のモニュメントと由来を書いた案内板があります。そばには石柱と観音堂があり、それらしい雰囲気が感じられます。江戸時代には合流地点を下ってすぐに橋が架かっており、そのそばに河岸場があったとされています。新河岸川は昔と比べ、現在は河川改修により蛇行が減り、流量自体も減っているようです。狭山湖畔を源流とした柳瀬川も合流地点では新河岸川とまったく遜色のない滔々と流れる立派な河川となります。引又の名前の由来は水子貝塚の学芸員氏によると、合流地点の形状がヒキガエルの足の形に似ていることからきているとの事です。

河岸場跡をもとに戻り、二つの川の橋と橋の間の地点に河岸場と舟運の歴史を紹介した案内看板があり、詳しく知ることができました。所沢から当地点までは約15キロ、荷車に農産物や薪炭を運び、引又で船に積み替え江戸で取引した輸送拠点だったので、皆さん改めて関心を持たれたようでした。こうした輸送拠点としての河岸場も沿線の鉄道に役割を奪われ、また、河川改修により、衰退し、今はその歴史を閉じています。

引又河岸場跡を示すポール前

「道しるべ」の碑　（富士見市指定文化財）

柳瀬川の護岸壁に舟運の歴史絵図が書かれた志木市役所のそばのバス停から水子に向かいます。岡の坂上でバスを降り、行楽には絶好の日和のなか数分歩くと、河岸街道が存在したことを示す「道しるべ」の石柱がありました。江戸時代のもとにあった場所からは道路工事で多少の移動はされていますが、道しるべ には「所さわ三里、山下河岸三丁、引又十二丁、川ごえ三里半」と4方向が刻みこまれています。案内板・碑はともに読み取りに苦労したので、HPの助けを借りました。

この碑では農産物の集散地である所沢、河岸場で船問屋として栄えた山下河岸が注目されます。舟運は河岸場を中心に地域の発展に貢献していたこと、碑は山下河岸や陸上の交通網の存在を示すものになっています。出発点の所沢には旧所沢市役所の道路脇の植え込みの中の目立たない場所に水子と引又を示す石碑が置かれています。2つの河岸場への道が重要であったことが伺えます。

水子の道しるべ(左)と旧所沢市役所 水子・引又と読める石碑

■水子貝塚・資料館、環状集落（竪穴住居）見学　10時30分～11時35分

道しるべをみた後、歩いて数分のところに国指定水子貝塚があります。縄文前期の7000年前の縄文海進期には武蔵野台地の東北にある水子台地を下った先の新河岸川を含む荒川低地の大部分は比較的浅い海（古入間湾）となっていました。海を臨む谷には川が流れ、入り江をつくり、豊かな森と海の恵みを受けて、縄文時代の集落ができていました。水子の地名は湧き水がでる地域であったことによると言われています。当地は貝塚と縄文の環状に形成された竪穴住居を数棟復元した森に囲まれた公園になっており、資料館は無料で見学できるようになっています。

予約により富士見市の市民学芸員のお二人が我々のグループの説明に対応していた

だきました。
資料館内では貝塚と竪穴住居を紹介するビデオを特別に20分間放映していただき観賞しました。その後、館内の展示の貝塚はレプリカで発掘現場さながらに忠実に再現され、一目瞭然でした。使わなくなった竪穴住居の窪地に貝殻を捨てており、それが貝塚になっているようです。海辺のあさり、ハマグリ、牡蠣等に交じり、貝殻で意外なのは汽水領域に生息するやまとしじみが多く食されていたことで、水子貝塚の地形を反映するものとみられました。レプリカでは貝塚で発掘された中年女性の屈葬人骨や獲物を捕獲するために重要な犬が人の屈葬と同じ状態で埋葬されていました。古代人は犬を大切にし、家族同様であったと説明されました。資料館のガラス壁面には実際の貝塚も展示されていました。貝塚公園の元の土地は関東ローム層に覆われた畑でごぼうが栽培されていました。面白いことにローム層の下までごぼうの根が深く貝塚に食い込み、そのためごぼうを収穫した跡が貝塚に切り込んだ形で残されたことでした。

水子貝塚公園
解説に熱心
学芸員Ｓ氏

館内の説明が終わり、外での説明では復元した竪穴住居や貝塚は中央部に祭祀を行う場所であったため、環状に形成されたとのことでした。住居数棟のうち、縄文の家族の生活を再現した住居とかまどのみの2つの棟の内部に入り、細かい案内をうけました。小学生の見学を多く引き受けているようで、いい勉強になる教材が完備していると感じます。貝塚の場所は埋め戻され、白い石が敷き詰められて大事な文化財として管理されています。学芸員さんの解説は冗談も時折はいり、名調子でわれわれシニアにも楽しいひと時となりました。

■難波田城公園（資料館・城跡・古民家）見学　13:00～14:00

難波田城公園（富士見市）は荒川低地の一角に築かれた公園で広さは約 5 万㎡とされ、そこに上記の施設を整備した公園で、中核となる難波田城は埼玉県旧跡指定の平城です。公園内は大きく「城跡ゾーン」「古民家ゾーン」に区分けされ、その中に資料館があります。水子の久兵衛屋のボリュームたっぷりの昼食後、バスと腹ごなしの徒歩でここに

到着、ガイド氏はなんと水子と同じ学芸員S氏、胸の名札が変更になっただけでしたが、先ほどの双子の兄弟ですと冗談で紹介され、すっかり和やかな雰囲気になり、たっぷり 1 時間以上の案内が始まりました。

難波田城公園の配置図（難波田城資料館資料より）

難波田城の始まりは承久の乱（御家人を前に北条政子の御恩と奉公の檄で有名）で討死した金子高範の恩賞として、遺族にこの荒川低地の地域が本領としてあたえられたことでした。そこに舘を構え、金子改め難波田と称しました。金子氏は所沢を本拠とした武蔵七党村山党の山口氏とほぼ同時代に活躍した武士団ですので、居城の山口城郭を推定、比較するのに参考にできるのではないかというのが見学の背景にありました。

最初に資料館内部の展示を聞きました。武蔵七党時代から現代までの大変整備された展示品でした。特に難波田城跡から出土した遺物や生活用具・城郭模式図・名所図会ジオラマなど見どころ一杯でした。城は荒川が形成した自然堤防の微高地に築かれていました。荒川低地の人々の住居も多くは自然堤防上にありました。

復元された堀と橋幅

城郭ゾーンは城の約は 5 分の2を再現したものでしたが、その後の支配者により改修されていますが、舘の面影を十分に反映していました。特に堀や門・橋がきれいに整備され

ていました。橋の幅は出土した土台の杭をもとにし作った自信作とのことでした。本丸部分は公園外で、古くからの民家があり、立ち入りできません。また、周辺の道路部分はほとんどが堀にあたり、規模の大きさを感じます。

移築された古民家でゆったり骨休み

その後、古民家ゾーンを見学、ここでは水害から避難するための盛り土をした塚（みづか）の説明があり、この近辺の農家はこうした塚を築いたつくりが散見されるそうです。古民家 3 棟は所沢の黄林閣や旧島田家住宅と同様な雰囲気の大建築物で、応接専用の和室など興味深いものもありました。

なお、公園では 6 月の第 1 日曜日に城まつりが開催され、滝の城と同じく武者スタイルでの火縄銃の連射が行われると聞きました。

■終わりに

14:20 発のバス停に向かう。城の近くまでは帰り 1 日3便のバス停まで学芸員S氏の案内と見送りいただき、迷わずに助かりました。ふじみ野駅に 15:00 前に帰着し、ここで解散としました。

今回は、短時間に4つの史跡を歩くハードなスケジュールでしたが、道と川、台地と低地の人々のくらしと古代・中世・近世の歴史を満喫できたのではないかと思います。

担当:Cグループ(粕谷昇　原正次　佐野弘太郎　山本苗子　平野公子
関根平三郎　大舘徹　小川雅愛)